

# グアダルパニスモの理論的唱導者、 ミゲル・サンチェス： その著作と歴史的背景

北 條 ゆ かり

... este es el día que debió desearse, ...  
de aquí adelante los de México aviven las  
esperanzas y atiendan a las obligaciones :  
las esperanzas de que han de florecer.

Miguel Sánchez

## I はじめに

本誌304号において、カトリシズムが圧倒的に浸透しているラテンアメリカのなかでもとりわけメキシコにおいて、国民文化の一要素として根付いていると言える聖母信仰「グアダルパニスモ」の、初期発展段階にみられるクリオーリョ主導的性格について図像学的視点から考察を加えた。まずはじめに、メキシコ史においてグアダルパニスモとバロックのもつ文化的伝統としての独創性を指摘するデ・ラ・マサの、正鵠を射た言辭を引用した<sup>1)</sup>。しかし、独特の芸術様式とその精神であるバロック現象は、王室や教会当局の擁護策によって推奨されたり、あるいは裕福な階級の嗜好に沿い財政的援助を得たりすることで、比較的順調に広く人々の評価と支持を得て開花することが可能であったろうと思われるのに対して、そして実際、スペインとその支配下の新大陸全般において広範に普遍的な様式へと変容し定着しえたのに対して、信仰の問題であるグア

1) 拙稿「植民地期メキシコにおける《グアダルーベの聖母》信仰に関する一考察」彦根論叢第304号、平成8年12月。

ダルパニスモは、普及するまでにかなりの時間を要し、民衆レベルでも教会の公式見解のレベルでも今の地位を獲得するのに難渋の道を経たと言えよう。それにもかかわらず、ラテンアメリカの各地にみられる似通った聖母信仰や聖人信仰のうち、グアダルーペの聖母ほど都市部でも農村部でも等しく、全国的な崇拝を享受するものはほかにないのではないだろうか。

そのグアダルパニスモの浸透を促す最初のきっかけとなった著作が1648年のミゲル・サンチェス Miguel Sánchez の、『メキシコ市に奇蹟的に出現した神の母なるグアダルーペの聖母マリア像について、そのいきさつを黙示録第十二章の預言をもとに語った書』である<sup>2)</sup>。

第二代メキシコ大司教アロンソ・デ・モントゥファル Alonso de Montúfar がグアダルーペの聖母信仰を称揚する説教を行なったのが1556年のことであり、その直後(二日後)、フランシスコ会士のフランシスコ・デ・ブスタマンテ Francisco de Bustamante がこれを偶像崇拝を奨励するに近い行為であるとして、反撃の説教を行なったことに対し、モントゥファルが弁明を意図してブスタマンテの論拠の調査を命じたという経過がすでにあつたわけであるが、その調査報告は利用される機会のないまま保存されていた<sup>4)</sup>。ようやく17世紀半ばになってミゲル・サンチェスがグアダルパニスモを取り上げ、これにクリオーリョ層<sup>5)</sup>の同胞意識や郷土愛的、愛国的精神を覚醒させ増進させるような解釈を与えたと位置付けることのできる上述の著作を表わした。それまでの百年近くものあいだ、この聖母信仰についての形跡を残している史料は存在せず、長い潜伏期間にあつたように見える。確かに、1609年に着工していた新聖堂が1622年に完成し祝われたことからわかるように、それだけの寄付が得られるほどの信者を集めてはいたと言えようが、まだ信仰はテペヤクの霊場に局地的に限られた

2) Sánchez, *Imagen de la Virgen Marta, Madre de Dios de Guadalupe, milagrosamente Aparecida en la Ciudad de México. Celebrada en su Historia, con la Projecta del capítulo doze del Apocalipsis*, Imprenta de la Viuda de Bernardo Calderón, 1648.

3) Información, 1888.

4) O'Gorman, p.106.

5) Brading, p.377; Lafaye, p.351.

もので、メキシコ盆地ですでにみられた他のマリア像や聖人像に対する信仰に比べて特別熱狂的だったわけではないようである。サンチェスの著作が時宜を得て世に現われていなかったなら、消滅し忘れ去られていたかもしれないのではないかと思われるほどである。実際、グアダルーペの聖母をめぐる教会公認の伝説（顕現・奇蹟譚）はサンチェスに基づいている。しかしながら、グアダルーペの聖母と黙示録の結びつきをめぐるサンチェスの釈義が傑出して独創的だったというわけではないらしい<sup>8)</sup>。考慮しなければならないことは、サンチェスの著作が誕生した時点とその直前の歴史的背景であると考えられる。そこで、本稿ではヌエバ・エスパーニャの精神生活に関連していた、あるいは影響を与えたと考えられる背景・要因を明らかにしながら、それらがサンチェスの著作にどう具体的に現われているか、サンチェスが「祖国メキシコの真の創出者<sup>9)</sup>」と評される核心と論拠はどこにあるのかを検討していくことにする。

6) O’Gorman, p.281-283；汎イベロアメリカの聖母信仰についての古典的研究に Vargas Ugarte があるので参照されたい。

7) 1674年、サンチェスの死を悼み、ある日記出版家の言葉につきのようにある。“Compuso un docto libro, que al parecer ha sido medio para que en toda la cristiandad se haya extendido la devoción de esta sacratísima imagen, estando olvidada aún de los vecinos de México hasta que este venerable sacerdote la dio a conocer, pues no había en todo México más que una imagen de esta soberana Señora en el convento de Santo Domingo, y hoy no hay convento ni iglesia donde no se venera, y rarísima la casa y celda de religiosos donde no esté su copia. . .”, en Antonio de Robles, *Diario de sucesos notables (1665-1703)*, citado por Brading. (下線は筆者による) [(サンチェスは) 学究的な書をもした。その書は、キリスト教徒のあいだに広く、グアダルーペの聖母信仰が浸透する手段となったようである。この信仰は、サンチェスが知らしめるまで長い間、メキシコ市の住民にも忘れられ、その像はドミニコ会修道院にあるだけであったが、今(1674年)ではこの聖母の像を飾っていない修道院や教会はないほどである。]；Lockhart, p.246.

8) サンチェスの本書がグアダルーペ伝説の起源となり、メキシコ人にとってのナショナル・アイデンティティ構築の端緒となったとする点では、Nogues, p.109；Nebel, pp.268-272. 1636年、すでにオアハカの fray Alonso del Castillo が説教において、「聖処女マリアの無原罪の御孕り」像が聖ヨハネの視た黙示録の女性と同一であると述べ、同十二章を描写している。ただ、これをグアダルーペの聖母と照合するにはいたらなかった。(citado, por De la Maza, p.39)

9) Lafeye, p.353.

## II 17世紀前半のヌエバ・エスパーニャ社会

以下では17世紀の初頭から1648年までの半世紀をとらえ、この時期の政治・社会面で重要と思われる事象をとりあげ、それぞれの項目において年代順に主たるできごとを追いながらミゲル・サンチェスの著作が誕生した背景を考察する。<sup>10)</sup>

### (a) クリオーリョとペニンスラールの対立

人種的には同じスペイン系の白人でありながら、出生地の違いに基づく種々の差別から生じていた両者の対立は、すでに16世紀半ばから顕著となりはじめ広きにわたって観察されたのであるが、聖職者のあいだでより明白な根深い紛争が起こっていた。

17世紀初頭の十年間(1600-1610年)は、ヌエバ・エスパーニャのフランシスコ会において新大陸生まれのクリオーリョとイベリアのバスク出身者のあいだに激しい内部不和の高まった時期だった。後者はフランシスコ会全体を支配し、クリオーリョの同僚が修道院長や修道会管区長に任命されることを妨害していた。<sup>11)</sup>

この問題は聖界と俗界の為政者、権力者のあいだでとくに明白かつ複雑にみられるので、次の項目で具体的状況を追うことにする。

### (b) 副王、大司教、アウディエンシアの政治的対立

1621年、フェリペ四世の即位後フェリペ三世の寵臣だったレルマ公爵の腐敗政治に対する改革運動が始まってまもなく、ヘルベス侯爵 *marqués de Gelves* が副王に任命された。レルマ公爵はオランダと休戦協定を結んでいたが、それ

10) 本章の叙述は主として、Israel, Sosa, Riva Palacio, Alberro[1992; 1993]等に依拠している。

11) Bentze, pp.95-96; Alberro[1992], pp.44-45 y 101; Torquemada, pp.43-44; Phelan, pp.106-111.

は戦費の調達が困難になったためにほかならず、国内の宗教的統一政策を強引に進め、モリスコ（旧イスラム教徒）の国外追放を断行した結果、農業の衰退を招いたほか、インフレーションを悪化させ、製造業の衰微を抑止することもできないでいた。21年はオリバーレス伯公爵が新国王に代わって、以後22年間国政を支配する時代の始まりとなった。その改革プログラムの鍵は財政再建の成否にあったため、新大陸はその要と目された。その理由は単に重要な歳入源であったからばかりではなく、管理の甘さから脱税や官僚の汚職によって巨額が失われていたからである。<sup>12)</sup>

一方、ヌエバ・エスパーニャ当局内部は決定的な分裂状態にあった。アウディエンシアの聴訴官三人が副王グアダルカサル Guadalcázar を暴君として告発し、本国のインディアス枢機会議に解任決定を促した。そして彼らは次の副王ヘルベスが着任するまでのあいだ、大量のトウモロコシと小麦を独占したり、メキシコ市の排水工事の予算を横領したりして、地位を利用し私腹を肥やしたのだった。大司教のデ・ラ・セルナ De la Serna も新副王のヘルベスも、この惨憺たる状況をインディアス枢機会議に報告している。<sup>13)</sup>

デ・ラ・セルナは1612年以来大司教の座を占め、19年には修道会の支配する先住民教区での司教権をめぐる副王グアダルカサルと衝突していた。このことは植民地時代恒久の紛争の種であった。<sup>14)</sup>なかでもフランシスコ会士はこの大司教の主張を、修道会が苦勞して育てた改宗先住民との世界を破壊し、修道司祭を世俗司祭に交替させる最初の一步であるとみなし、強硬に反対した。副王はこのとき本国の指令に反して修道会を支持した。しかしグアダルカサルの退任後21年初頭、デ・ラ・セルナは修道士ではなく自らの選んだ聖職者を先住民村に送り込む強硬策を採ろうとした。それに対し、官僚の腐敗に対するクリオ

12) スペインの状況については、ビーベス, pp.138-145; 立石・若松, pp.51-54, ヌエバ・エスパーニャについては, Israel, pp.140-142; De la Peña, pp.22-23; Elliott, pp.117 y 132-133.

13) Israel, pp.145-146; De la Peña, pp.23 y 147-148; Sosa, pp.151-156.

14) Israel, pp.145, 178, 185, 189, 202, 207 y 209; Sosa, pp.149 y 200-208; Riva Palacio, pp.576-590, Rubial García, pp.13-14.

ーリョの反対運動とグアダルパニスモの擁護を先導するデ・ラ・セルナがアウディエンシアと対立していたのを利用して、修道会側はアウディエンシアを味方につけた。24年まで続くこの衝突の最大の皮肉は、大司教と副王という聖と俗の両界の長が、不満の主たる原因が慢性化した腐敗の風潮にあると考える点で一致していたということである<sup>15)</sup>。ヘルベスはフランシスコ会の重鎮トルケマダの進言を受けて修道会士の側につくことを決めたため、今度はデ・ラ・セルナが副王と反目するアウディエンシアと同盟した。

22年末、アウディエンシア長官ベルガラ・ガビリア Vergara Gabiria の取り計らいでコレヒドールの役職を二カ所で不法に占めていたバラエス Varáez という人物が、任地のひとつであるメテペックの先住民から収穫物を奪い、それをアウディエンシアの仲間との農作物独占に乗じて高値で売ったという廉で告発された。副王は審理を遅らせている裁判官からこの件を取り上げ、特別法廷に委譲した。それによってバラエスは有罪となったが逃亡し、ドミニコ会の修道院に避難したため、罰金を料したウエインディアスから永久追放するという判決が下った。翌年10月、バラエスがベラクルスへ逃避しようとしているとの噂で、特別法廷の裁判官は修道院に監視を派遣した。これに対して大司教は庇護の権利と聖職者特権の侵害であると訴え、監視の撤退を求めたが裁判官が拒否したため、この人物を破門すると宣告した。大司教の使者らがこのことを告げに行く途中、騒ぎを引き起こしたことから、副王は大司教を本国送還に処するとし、大司教は逆に副王をも破門しようとした。副王はアウディエンシアを召集し、大司教による副王の破門と追放の如何を問おうとしたが、アウディエンシアは決定を避けた。そこで副王が聖職者と大学人を集め結論を促したところ、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティヌス会、メルセス会の修道司祭と大学人は副王を支持したが、教区司祭、イエズス会士、カルメル会士は大司教支持にまわった。副王は法王代理に、大司教が破門状を撤回するよう命じ

14) Israel, pp.145, 178, 185, 189, 202, 207 y 209; Sosa, pp.149 y 200-208; Riva Palacio, pp. 576-590, Rubial García, pp.13-14.

15) Israel, pp.146-147.

てほしいと依頼したが、大司教は法王代理の言葉に一切耳を貸さなかった。その後一転してアウディエンシアが大司教の追放を承認するにいたり、大司教は首都を出て、予告したとおり24年1月15日以降礼拝活動は一切停止した。<sup>16)</sup>

これが引き金となり同日中央広場において暴動が勃発したが、下級司祭の指揮で驚くほど統制が保たれていた。大司教の追放決定を取り消したため投獄されていたアウディエンシアの三名とバラエスを解放させるという明確な目的を実行に移し、副王宮殿の中の牢獄として用いられていた箇所を占拠しようとしたとき、副王は群衆に対する銃撃を命じ多数の死者を出した。そこでベルガラ・ガビリアが総監に就任し、約四千のクリオーリョからなる民兵軍を指揮した。副王は変装してようやくのことで逃げのび、同日夜、大司教が歓呼の声のなかメキシコ市に帰還した。この暴動には、インディアス史上はじめて副王がアウディエンシアとクリオーリョ層によって打倒され、マドリードの命じる改革政策が停止させられたことにおいて大きな意味がある。教区司祭も群衆の決起を扇動していた。食糧品の略奪行為などはまったくなかった。原因はつとに複雑な社会内部の政治的緊張にあった。さまざまな社会層と統治組織、それに財力と権力を有する人々のあいだの結合によって、副王打倒の陰謀が計られたのである。<sup>17)</sup>

この結果、汚職が再び蔓延し、浮浪者や売春婦が溢れ、ポルトガル人など事業を営む外国勢力は繁栄を続けた。ヘルベスは新副王セラルボ侯爵 *marqués de Cerralvo* が到着するまでフランシスコ会の修道院に幽閉された。そしてアウディエンシアは弁明のためデ・ラ・セルナ以下代表団を本国に派遣した。<sup>18)</sup>

セラルボ着任の翌25年、巡察使カーリーヨ・イ・アルドレテ *Carrillo y Aldrete* が到着したが、実は副王の身に何らかの事態が発生した場合、ヌエバ・エスパーニャの臨時統治者となる旨の秘密文書を携えていた。それは本国政府が今後二度と副王の代理決定をアウディエンシアに信任しないという重大な変更を意

16) Israel, pp.145-150; Sosa, pp.153-154; Riva Palacio, pp.563-566.

17) Israel, pp.151-163; Sosa, pp.155-166; Riva Palacio, pp.569-575; Gage, pp.178-187.

18) Israel, pp.165-166.

味していた。巡察使の報告は、副王が難局をうまく裁いているとしながらも、アウディエンシアが組織した民兵軍を治安維持のために保持するよう勧告していた。前年の暴動以来、副王にとって統治は困難を極めていたと言えよう。以後、本国政府は間髪を入れず対処に出るために、デ・ラ・セルナをもはやヌエバ・エスパーニャに戻らせず、大司教職を解任し、28年、新たにマンソ・デ・スニガ Manso de Zúñiga に暴徒に対する赦免状を持たせて赴任させた。この新大司教はすぐにクリオーリョ層と世俗司祭の信任を得、厳格すぎた巡察使を解任し、ヘルベスを投獄すると同時にベルガラ・ガビリアを解放した。こうして見てみると、本国から派遣された権力者の多くは、インディアスに着任するとまもなく、インディアス（アメリカ大陸）の人間とその權益を支持する〈アメリカニスタ〉に転身するのがあたかも常だったかのようである。それだけインディアスにはもはや、出生地にだけ縛られることのない地元地域に根ざした利害関係と、アメリカ大陸に根づいた者〈アメリカーノス〉としての共通意識が強まっていたということではないだろうか。<sup>19)</sup>

40年、巡察使として派遣されたフアン・デ・パラフォクス・イ・メンドサ Juan de Palafox y Mendoza は17世紀ヌエバ・エスパーニャの政界でおそらく最大の影響力を放った人物である。<sup>20)</sup>同時にプエブラの司教も務めた。修道会の大地所有、蓄財、影響力増大を批判し、クリオーリョと世俗司祭のあいだで最も信任の厚い代表格となった。パラフォクスの諸改革は逆に副王配下の官僚役人に不利であった。自らの治めるプエブラ司教区の大部分の宗教活動が修道司祭に任されていることに同意しかねたパラフォクスは、世俗司祭がヌエバ・エスパーニャ社会の特権的階級のなかで最も不満に充ちたセクターであるかぎり、社会の安定は獲得できないままであろうと本国に報告している。聖職者の内部抗争は翌41年になっても続いていたので、副王ビリエナ侯爵兼エスカロナ公爵（同時にこの年ポルトガルの独立を宣言し国王ジョアン四世となる人物の親戚でもあった）marqués de Villena y duque de Escalona はついに介入し、修道

19) Israel, pp.174-174 y 145-146; De la Peña, p.151.

20) Brading, p.279; Israel, pp.203-204.

司祭に任された教区を世俗司祭の支配下に変えることはさせないと宣言したが、このことは本国政府の意にそぐわぬものであった。<sup>21)</sup>

オリバーレスはこの副王を嫌いパラフォクスを支持し、42年、セラルボとカトレイタの治績審問を行なう職権を与え、新しいメキシコ大司教に任命したが、パラフォクスはプエブラ司教の立場を重んじ、これを固辞した。同年、半年間足らずではあったが、パラフォクスの副王としての治世に、異端審問によって150名のユダヤ教徒が捕えられた。そしてパラフォクスはコレヒドールによる職権濫用の取締ほか、首都の民兵軍を改革し、民兵軍の中でより多数のクリオーリョの役職任命を決定したり、アセンダード（大農園経営者）が先住民労働力を確保できるよう債務奴隷制を増強させる便宜を計ったりした。42年11月にパラフォクスは副王職をサルバティエラ伯爵 conde de Salvatierra と交代したが、以来1648年5月までの五年半は、植民地時代で最も混乱した一時期となった。<sup>22)</sup> プエブラ司教のパラフォクスはイエズス会士との対立を深めた。この反目は教会の富の分配をめぐる教区司祭とイエズス会の争いであり、パラフォクスにはクリオーリョが、イエズス会士にはペニンスラール官僚が同盟していた。1640年頃、ヌエバ・エスパニーヤに進出して半世紀余りですでにイエズス会は大土地を所有しており、<sup>23)</sup> 教会特権に基いて十分の一税の支払いを拒否したため、教区司祭側は収入面で負の影響を被らないよう支払いを要求し抗争は激化した。パラフォクスの改革諸策は悉くイエズス会との不和の要因となった。たとえば、教育に力を入れるために学校にあたるコレヒオーセミナリオを創設し、17世紀半ばにはイエズス会のコレヒオを凌ぐようになっていた。また、1618年から中断していたプエブラ大聖堂の建築を再開させ、改革の意気込みを象徴する立派なものを完成させた。<sup>24)</sup>

44年、パラフォクスの計らいによってフアン・デ・マニョスカ Juan de Mañozca

21) Riva Palacio, p.590 ; Israel, p.212.

22) Israel, pp.131 y 215. 最大のできごとのひとつが1649年の火刑である。

23) Konrad, pp.370-371 ; Chevalier, pp.294-302.

24) Israel, pp.220-228 ; Brading, pp.269-175.

がメキシコ大司教に叙任され、異端審問所の巡察使にもなった。バスコ出身でクリオーリョへの偏見を抱いていたと思われるが、同姓のいところである異端審問長官ファン・サエンス・デ・マニョスカ Juan Sáenz de Mañozca と結んでサンチェスやラソを保護し、彼らも著書の中で厚く謝辞を述べている<sup>25)</sup>。異端審問は世俗および教会の階級制度から独立した強力な組織であったから、既存の支配者階級から冷遇された新興のクリオーリョ層にとり、自己の野心を遂げるうえで強力な味方となったのである<sup>26)</sup>。

### (c) ヌエバ・エスパーニャ在住の外国人勢力

外国人の多くが鉱山業、印刷業、建築業などで成功を取っていたが、とくに商業・貿易の分野では官僚の腐敗とスペインの非効率な財務体制を利用し、密貿易の実権を握ったり、商才に欠けるスペイン人に代わって商売を繁盛させたりして富を貯えていった。この外国人勢力をめぐって副王政府内は支持派と反対派に二分したばかりか、ペルーとの交易の認可継続か禁止かという決定に関しても、いわばトランスナショナルな経営を行っていたこの外国勢力の影響を大いに受けていた。また、不法滞在の外国人の法的立場を一定金額の支払いによって合法化する「コンポシション」という手続きがあり、これを受けた数が1615年に338名、そのうちの半数余りがポルトガル人であり、1625年に70名、その四分の三近くがやはりポルトガル人であったとわかっている<sup>27)</sup>。もちろんこの数字には最初から合法的に渡来した者やコンポシションの手続きをとらずに非合法のまま滞在していた者は含まれていない。しかしいずれにせよ、後述する1624年の暴動においても、新副王ヘルベス侯爵の税関取締強化策に反対して、主に貿易に従事するポルトガル人が積極的に加わっていたことは、ユダヤ商人の存在の大きさを物語っていると言えよう。商店主、職人、行商人、放浪者な

25) Sánchez, 6.216(異端審問長官に対する謝辞) y p.244(副王 Salvatierra に対する謝辞); Israel, pp.231-232.

26) 染田秀藤「異端審問」, 歴史学研究会編『南北アメリカの500年』第1巻, 1992年, pp.258-259.

27) Israel, pp.125-130.

どが外国人の大部分であったが、知識層を形成していた大商人はヌエバ・エスパーニャの最富裕階級に数えられ、とりわけアフリカ人奴隷の輸送、ベネズエラからのカカオの輸入(1630-40年代ヌエバ・エスパーニャの重要輸出品目)、<sup>28)</sup> 中国・スペイン・北欧・地元の織物の売買に従事していた。

彼ら外国人勢力がユダヤ教や新教など異教的要素の影響をどれほど旧教徒に對して与えたか、着目する必要がある。

#### (d) 異端審問

1621年は、異端審問がこの時期で最も頻繁に行なわれた年である。その内容の多くは、公にはされなかったが、聖職者の女性に対する性的誘惑、いやがらせであった。<sup>29)</sup> 概して異端審問の攻撃の最大の対象となったのは、ポルトガル出身の隠れユダヤ教徒 (criptojudfos ; judaizantes ; marranos) であり、1630-40年と1642-50年の二期にわたって大量の処分がなされた。<sup>30)</sup> その数は1620-50年間に総勢二百名余りにのぼった。そのうち、百名近くがポルトガル出身者で、約35名がヌエバ・エスパーニャで生まれたその第二世代、15-20名がフランス、イタリア、ペルーのいずれか出身のやはりポルトガル人子孫であった。<sup>31)</sup> なかでも1649年のマラーノを対象とした109人という大量火刑は三万人の観衆を前にして行なわれたという。<sup>32)</sup> これは上述の(c) でみたように、植民地社会におけるマラーノの経済力の増大を恐れたクリオーリョの社会的要求を反映したものと<sup>33)</sup> 言える。

#### (e) メキシコ市の状況と当時の人口構成

28) Alberro[1993], p.542; Israel, p.133.

29) AGN Inquisición 334 y 337, referente al año de 1621(citado por Israel, p.130).

30) Alberro[1993], p.551; Israel, pp.131-132.

31) Alberro[1993], pp.553-557. このようにポルトガルからの移住者が多かったのは、1580年から1668(実質は1640)年までスペインに属していたからである。

32) Alberro[1993], p.581; Gruzinski, pp.126-127.

33) 染田「異端審問」, 前掲書。

メキシコ市は、征服の時点ですでに世界最大の都市であった。そしてスペインの統治下にあったバロック期、啓蒙期においてもヨーロッパ世界のなかの大都市のひとつに数えることができた。たとえば、バロック文化の創造拠点としてブラハやナポリと並ぶ重要な都市であると認識されて<sup>34)</sup>いた。征服以来、そしておそらくはそれ以前から異なる文化と民族が混成した、メスティサへの特殊な過程を示す場所として特徴づけられる。その意味は社会的矛盾、紛争、支配と搾取の過程がなかったということではなく、互いに異なる世界が対峙し、衝突し、組みし合う場でありつづけてきたということである。16世紀、ヨーロッパ文化と先住民文化が衝突し、先住民大多数の中に少数派のスペイン人が定着し、17世紀、バロック都市メキシコはアフリカの香り漂う都市でもあった。先住民、スペイン人、メスティソとともに黒人とムラートは重要なマイノリティであった。そこには同時代のヨーロッパの都市と同じくバロック都市でありながら、生活する住民はアフリカ人、ムラート、メスティソまたは先住民からなり、宗教習慣、祝祭、民族衣装、食生活、住環境、家族関係など、いずれの日常性をとってみても多彩な世界があり交錯して<sup>35)</sup>いた。

ヌエバ・エスパーニャの人種別人口動態を、1570年と1646年の時点でみると、この間の増加率と総人口に占める割合(%)がそれぞれ次のようになる<sup>36)</sup>。

ペニンスラールは2倍(0.2→0.8)、クリオーリョは15倍(0.3→10)、黒人は1.7倍(0.6→2)、ムラートは48倍(0.7→6.8)、メスティソは45倍(0.7→6.4)に増加したのに対して、先住民は約1/4(99→74)に減少している。総合でも338万人から171万人へと1/2近くに減少していることがわかる。ただし、この分類では、生物学的にはメスティソだが、先住民的生活を送っているため

34) Cue, Alberto, Entrevista con Serge Gruzinski, "La historia de la ciudad de México: una empresa paranoica", en *La Jornada Semanal*, 20 de octubre de 1996. このインタビュー記事は、Gruzinskiの新刊書 *Histoire de Mexico*, Librairie Arthème Fayard, 1996の内容に基いている。

35) Alberro[1992], pp.60-61, 81-82, 153-155 y 166-167; Benítez, pp.31 y 37.

36) 篠原愛人「スペイン領アメリカ ヌエバ・エスパーニャ副王領」, 染田秀藤編『ラテンアメリカ史: 植民地時代の実像』, 1989年, pp.58-59.

に先住民とみなされた者が含まれているとも考えられるので、実際の先住民人口はこの数字よりまだ低かった可能性もある。また、人種構成や人口の増減には地方差がかなりあることにも注意を払う必要があるという。都市部を中心とした中央部では、白人人口の集中と同時に先住民人口の流入の傾向があったと思われる。

これに加えて、上記の研究やバークレー学派の成果を踏まえたロマーノの最新研究をも参照してみると、まず、イベロアメリカ全体の先住民人口の変動は、1500年3900万人、1600年1000万人、1700年1000万人となる。これは、16世紀が激減の世紀であったということを示している。その原因として挙げられるのは、ジェノサイド、疫病、高地や寒冷地から海岸部への、またはその逆の強制移住、苛酷な労働、従来の社会構造（とくに文化的脈絡での〈家族〉）の崩壊、サンチェス・アルボルノスの指摘する〈生への無気力症〉、各家庭の子供の数の減少（自殺、アルコール依存、妊娠中絶等による）があろう。現メキシコの中央部にあたる地域の先住民人口規模は征服開始の1519年の時点で1100万人だったものが、1650年には150万人となる。この減少をいくらか補ったのが白人と黒人奴隷の到来とその後の自然増加である。諸説のなかからカーティンの最少で確実な数字をとって、イベロアメリカ全体の黒人流入人口は、1526-1600年に12.5万人、1600-1700年に85.2万人とみる。ヌエバ・エスパーニャの白人人口は、1570年の6.3万人から1646年の12.5万人への増加がみられ、その大半が中央部の首都周辺に偏っていた。（それぞれの時点で5.7万人と11.4万人）しかし白人人口の増加は先住民層にとって租税や労働などの重圧をさらにもたらし、人口減少の状況を悪化させた。また白人層は、プエブラの例にみられるように都市を形成していったが、都市建設でつねに代償を支払わされたのは先住民であった。17世紀はまた、メスティーン人口が大量に増加した時期でもあった。先住民人口の最下限は1650年にあるとしたクックとシンプソンに対して、ミランダはこれを1630年に修正しているが、いずれにせよ、1600年以降も減少は続いていたということの意味している。以上のロマーノの最新報告を補填することがらをイスラエルに見いだすことができる。17世紀のヌエバ・エスパーニャ中央部の白人人口

の動態に関してであるが、1654年には大水害が始まった1629年時点に比較して25%減少していた。そして同地域の先住民人口はこの間165万人から30~40万人に減少したと推測される。<sup>37)</sup>

このようなメキシコ市の環境では、互いに異質で活発な宗教生活が営まれるなか、とくに定住するにいたった先住民層やメスティーソ層の生活と信仰形態にはヨーロッパ化の影響が強まっていったことであろう。

#### (f) 災害の影響

29年にメキシコ市を中心に襲った大水害が契機となって、大司教と副王の対立が再燃した。それは、たとえば、災害からの復興事業をめぐる利害関係の相反する派閥が、それぞれ大司教側と副王側に二分してついたりしたからである。他方、商工業は麻痺し、市場や穀倉も大打撃を被った。スペイン人住民が他市へ移住し、メキシコ市の白人人口は1654年にいたっても水害前の1/4~1/3は少なかった。代わって近郊から先住民が流れ込み、荒廃した地区を埋めることもあった。<sup>38)</sup>水害は繰り返し起こり、その後にはペストなどの疫病の流行が続き、災害の影響は35年頃まで及んだ。多くの死者を出し、大西洋貿易も滞った。<sup>39)</sup>この暗黒の時期にはグアダルーペの聖母も司教座聖堂に担ぎだされ、多くの信者の参詣を集め、聖母に捧げる詩歌や聖画像も生み出されるようになった。<sup>40)</sup>

#### (g) 経済活動

1620年頃を境に経済的繁栄が翳りを見せ始めていた。<sup>41)</sup>

34年には、ヌエバ・エスパーニャに対してペルーとの交易禁止令が発布され

37) Romano, pp.29-55; Borah y Cook[1989], pp.215-238; Ibid.[1994(1962)], p.2; Miranda, pp.13-20; Israel, p.40.

38) Benítez, p.24; Israel, p.183.

39) Alberro[1992], p.157; Gage, p.173; Gruzinski, p.122.

40) Sánchez, pp.175, 221-223 y 251.

41) Romano, pp.38-41; Israel, p.36.

た。水銀の供給に問題が生じ、<sup>42)</sup> 鉱業生産も停滞期に入った。

36年、副王カデレイタ侯爵 *marqués de Cadereita* の統治が悲観的な状況で始まった。オランダ人の進出によってカリブ海域の通商が混乱し、とくにグアテマラとベネズエラのカカオの価格が高騰した。<sup>43)</sup> スペインのヨーロッパにおける覇権を求める積極的な対外政策の続行を図るオリバーレスによってすでに26年立案された軍隊統合計画の一環として、インディアスに対しては兵員徴募の代わりに上納金が要求されたが、それに際して、最も豊かであったはずのヌエバ・エスパーニャへの要求額はペルーに対するよりも一万ペソ少なかった。この点に、本国がヌエバ・エスパーニャ経済の退潮を認識していたことが窺われ<sup>44)</sup> る。

王室歳入からみた場合、ヌエバ・エスパーニャ経済は沈滞期にあったかのようであるが、クリオーリョは地元のネットワークを活かし、また外国人との密貿易とも何らかの関係をもち、実際はこの時期に経済力を貯えていった。このことは、政教の両世界での影響力を徐々に強めていくのに役立ったにちがいない。<sup>45)</sup>

#### (h) スペインの危機

35年にフランスは新教徒諸国に組してスペインに対して宣戦布告した。オーストリアとスペインの両ハプスブルク家のヨーロッパ支配が築かれることを恐れたからである。三十年戦争は、宗教戦争の枠を完全に越えてハプスブルク家とブルボン家の対抗を軸とする国際戦争に発展した。<sup>46)</sup> 以後スペインの戦局が急速に悪化したのにつれて、王室はインディアスのクリオーリョに資金拠出を求めるようになり、クリオーリョはその交換条件として市参事会を中心に数々の要請を打ち出した。<sup>47)</sup>

42) Romano, p.17; Israel, pp.127-129 y 191.

43) Israel, p.191.

44) Elliott, p.141; Israel, p.148.

45) Romano, pp.138-139; Israel, pp.38-39 y 139.

46) Elliott, pp.113, 116 y 121.; 立石・若松, p.53.

47) Israel, pp.201, 208 y 219.

40年、カタルーニャで以後十年以上にわたって続くことになる反乱が広がった後、ポルトガルもスペイン王室に反旗を翻し、独立を宣言したので、ヌエバ・エスパーニャでも（d）で既述したように隠れユダヤ教徒と同一視されるポルトガル人とスペイン人とのあいだに緊張の空気が流れた。<sup>48)</sup>

本国のこうした政治的経済的危機によって、イスマノアメリカはより大きい経済的犠牲を強いられ、裕福なクリオーリョ層は不満を募らせていった。

### III ミゲル・サンチェスのグアダルーペの聖母に関する著作

ミゲル・サンチェス Miguel Sánchez (1606-1674)<sup>49)</sup>は聖フェリペ・デ・ヘスス San Felipe de Jesús<sup>50)</sup> やリマの聖ロサ Santa Rosa de Lima<sup>51)</sup> のようなクリオーリョにまつわる主題を専門とする著名な説教師であった。<sup>52)</sup> 1640年、聖フェリペを「インディアスのキリスト」と呼び称揚する説教を発表したときからすでに、グアダルーペの聖母についての大作を書く意志を表明していた。<sup>53)</sup> そして8年後

48) Ibid., pp.94, 116-117 y 181-182.

49) De la Maza は生年を1594年としている。

50) メキシコのクリオーリョで初めて、1627年に列福され、29年にメキシコ市の守護聖人に認定された。

51) 中南米で最初の聖女。

52) Blanco, p.98. 学士司祭 bachiller presbítero, あるいは神学者とも呼ばれる。

53) “quedo con esperanzas de otro mayor escrito : la segunda Eva en nuestro santuario de Guadalupe”, citado por De la Maza, p.49. [私は本書より大部の書を執筆したい所存である。それはグアダルーペの聖地の第二のエバに関してである。]また、この説教において主題から逸れた形で、グアダルーペの聖母をとりあげ、クリオーリョを擁護して嘆きを表している。“Eres tú, México, Patria mía, una mujer portento, ... si estando en el cielo con un hijo pretende allí tragarte ¿ qué pasarán tus hijos en la tierra ¿ Padece cada uno lo que la estatua enigma : la cabeza de oro, pecho de plata, vientre de cobre, piernas de hierro y pies de barro. ... su desdicha está en los pies de tierra, de ser de esta tierra, que se presume por el mayor defecto”, citado por ibid. p.50-51. [(聖母よ,) そなたはわが祖国, メキシコの地, (黙示録の) 驚異の女性, …子を身ごもり, 天にいて龍にのみこまれようとしているなら, この地上のそなたの仔らはどうなるのか。このメキシコの地に生きる者は皆, 謎の彫像と同じものに苦しめられている。すなわち, 金の頭, 銀の胸, 銅の腹, 鉄の脚, 土の足である。…この地の人々の不幸は土の足にある。最大の弱

それを実現し、グアダルーペの聖母像に関する最初の書物はサンチェスによって1648年出版された。その重要性にもかかわらず、M. サンチェスの著作と思想を詳細に検討している研究はいまだないので、執筆の動機や意図を探ることにしたい。

グアダルーペの聖母に対する信仰は、17世紀初頭まではもっぱら民衆のもので、主に先住民層によるシンクレティズム（彼らの地母神トナンツィンと聖母マリアを重層させるといふ）が中心であったようで、知識人のものではなく、知識人による宗教的解釈もまだ明確には存在しなかったと言える。<sup>54)</sup> 聖母像が神の創造物であるという見解が詩歌の中にこの頃からはじめて見いだされるようになっていく。<sup>55)</sup> グアダルーペの聖母像の複製版画や絵画が生まれだすのは1620年代以降である。<sup>56)</sup> これらの事実はグアダルーペの聖母に対する信仰が少なくともメキシコ市周辺において浸透しはじめていたことを示している。1629年、メキシコ市を中心に大水害が生じたとき、グアダルーペの聖母像が司教座聖堂に移され雨が止むよう祈願されたが、災害は5年間も続きグアダルーペの聖母の期待された効力は発揮されなかった。その証拠に、以後洪水の際のグアダルーペの聖母に対する願掛けはこのときが最初で最後となった。それなのに信仰が衰えることなく、水が引いたときには感謝までされたというのは、やはりもうその頃には信者を増やし続けていた証であろう。

以下にサンチェスの著書の分析を行なっていくことにする。冒頭に、司教座聖堂参事会員兼聖歌隊の先導者、フアン・デ・ポブレテ Juan de Poblete およびメキシコ市の聖アウグスティヌス会修道院の神学教師、ペドロ・デ・ロサス Pedro de Rozas による Aprobación 〈まえがき〉と、メキシコ市大聖堂の宝物

〕点の原因であるとされる、この土地生まれであるがために。〕

54) De la Maza, pp.38-39.

55) Ibid., pp.41-46. 1608年に capitán Angel Betancourt のロス・レメディオスの聖母に捧げる詩、1634年に8音節4行歌である作者不詳のコブラ、“Partida de nuestra Señora de Guadalupe”がある。

56) Ibid., p.47. 1620年より少し以前の Samuel Stradano による版画、1625年のサン・ルイス・ボトシでの Lorenzo de la Piedra の絵画等。

管理人で大司教座長官兼司教総代理、在メキシコ市の全修道院の教皇代理、異端審問所顧問等を兼任する人物、ペドロ・デ・バリエントス・ロメリン Pedro de Barrientos Lomelín に対するサンチェスからの献辞が記載され、グアダルーペの聖母をめぐる本書の意義、有益性が確認されている。<sup>57)</sup> 一般的に、17世紀のクリオーリョ学者や聖職者のあいだでは、「神はアメリカの発見と征服を許し味方し、さらには神自身が手を下しもした。それには確固とした明瞭な目的——アメリカに神の母なるグアダルーペの聖母が顕れるという——があったからである。」<sup>58)</sup> という見解が流布していたのではないかと推測できる。

サンチェスは序文にあたる Fundamento de la historia 〈「顕現伝説」の根拠〉において、聖母像と奇蹟についての記録を手を尽くして捜したが見つからず、事態の生じたときされる1531年当時の人々が将来のためにと伝え残したものに頼ったところ、いくらか発見できたと述べているだけで、具体的にどの記録を指

57) Poblete, en Sánchez, p.153: ... una historia tan prodigiosa, que toda es un milagro abreviado de la poderosa mano de Dios, para calificación de lo que su poder obró en la conquista de este Nuevo Mundo... descuido no haber sacado a pública luz la aparición de una imagen, que a todas luces es de las más prodigiosas... [これほど驚異的な話は、そのすべてが神の手の力強さに凝縮される奇蹟であり、その力がこの新世界の征服で成し遂げたことを高く評価するためのものである。…明らかに、もっとも驚異的な奇蹟に数えられるこの聖像の顕現が、これまで公の明るみに出されなかったことは過失であった]

De Rozas, en *ibid.*, p.155: ... La imagen de la Virgen Santísima de Guadalupe, entre los milagros de Dios es el portento; si nos admira, no tenemos palabras con qué definirlo; ... Dele gracias toda esta Nueva España, que después de ciento diez y seis años tomó la pluma para que lo que solamente sabíamos por tradición, sin distinción lo entendamos circunstanciado y definido con autoridad y fundamento. [グアダルーペの聖母像は神のおこした奇蹟中の奇蹟である。たしかに我々は、聖母像の前に目を見はり、その不思議に包みこまれるのだが、それを言葉で言い表わすことはできない。このヌエバ・エスパーニャのすべての者よ、これまで言い伝えでしか我々が知らなかったことを、権威と根拠に裏打ちされて、詳細に明確に、何もかも余すところなく理解できるよう、116年の後にこうして筆をとった著者に感謝すべきである。]

58) *Ibid.*, p.164: su tierra México, conquistada a tan gloriosos fines, ganada para que apareciese imagen tan de Dios. [聖母の地、メキシコは、かくも栄えある目的に基き征服され、かくも神の業なる聖像が出現するよう勝ちとられた。]

すのか明らかにしてはいない。<sup>59)</sup> 征服の記録、長老からの聴取、古文書の保持者といわれる人を通して調べても成果はなかったのだが、しかしたとえ何ひとつ記録が見つからなかったとしても、すでに確立している伝承にひたすら依拠して本書を著していたであろうとも述べ、テペヤクの丘での聖母顕現譚についての初めての完全な記述を本書においてこれから行なおうとする意気込みを感じさせる。グアダルーベの聖母顕現譚はサンチェスがすべて創り出したのか、それとも一世紀近くの間徐々に練られていった伝承に基づきサンチェスがそれに神学的基盤をもたせることで発展させたのかと考えてみると、おそらくは後者であろうと思われる。<sup>61)</sup> ラファイエが断言するように、サンチェスの貢献は史料による事実の解明ではなく、以下本書のなかで蕩々と述べられる釈義にあったのだと言えよう。<sup>62)</sup>

序文に続く部分 *Original profético de la santa imagen piadosamente previsto del evangelista San Juan, en el capítulo doce de su Apocalipsis* 〈黙示録第十二章で聖ヨハネが深い信仰心から予見した聖なる像の預言的原画について〉においてまず、黙示録第十二章での聖ヨハネの幻視の内容の中から、のちにグアダルーベの聖母像に関連して分析する要素をとりだして考察がなされている。そして聖母像はどこから顕れたのか、その起源は何にあるのかと考えたとき、師と仰ぐ聖アウグスティヌスから発想を得たことを冒頭で明らかにし

59) *Ibid.*, p.158: *Apelé a la providencia de la curiosidad de los antiguos, en que hallé unos, bastantes a la verdad.*; Altamirano, pp.58-60. [先住民古老の残した伝承を解明の方策として求めたところ、十分真相であると思われるものをいくらか発見できた。]

60) *Ibid.*, p.158: *confieso que aunque todo me hubiera faltado, no había de desistir de mi propósito, cuando tenía de mi parte el derecho común, grave y venerado de la tradición.* [何ら入手できなかったとしても、執筆の意図を私は断念しはしなかっただろう。人々に尊ばれ、普遍化している伝説が存在するのだから。]

61) サンチェスの本書の直接の影響は、Luis Lasso de la Vega, Luis Becerra Tanco, Francisco de Florencia に引き継がれ、早くは翌年から遅くとも二十年後までに著書となって表れた。

62) Lafaye, p.351.

ている。

... me señaló el sagrado paraje donde estaba y me descubrió el apostólico dueño que lo poseía In Apocalipsi Ioannis Apostoli scriptum est hoc, ...<sup>63)</sup>

〔聖アウグスティヌスが私に、どこに誰がこの話を書いたのかを示してくださった。それは使徒の聖ヨハネによって書かれた黙示録にあるのだと。〕

聖アウグスティヌス(354-430)とは、周知のとおり、旧約聖書を新約聖書の預言ととらえた初期キリスト教の教父である。その権威に従っていることを強調することによって反スペイン的な匂いのする解釈のために異端審問の対象になることから身を守ったとも考えられる。

このあと、Misterioso dibujo de la santa imagen, en la valerosa conquista de su ciudad de México〈聖母のメキシコ市に対する、勇敢なる征服における聖像の神秘的な役割像について〉と題した部分が続き、前節でとりあげた黙示録第十二章に登場する要素をグアグルーペの聖母顕現譚と照合し、両者の関連性を詳しく指摘する。その作業に入る前に、メキシコの征服の目的は先住民のキリスト教化ではなく、聖母顕現にあったという解釈を披露する。

... su tierra México, conquistada... para que apareciese imagen tan de Dios.<sup>64)</sup>〔聖母の地、メキシコは、かくも神の業なる聖像が出現するように征服された。〕

本節は純粋に神学的検討であるにもかかわらず、サンチェスの筆は同時代の背景を映しださずにはおれなかったようである。たとえば、①黙示録の女の着ていた太陽に関する部分で、スペイン国王を称揚し、かつ神はスペイン国王がアメリカを征服するまで聖母顕現を待ったのだとする。

Había Cristo de obrar estos efectos en aquesta tierra tan remota abrazada del sol, y como sol buscó para transformarse a otro sol, en empresa tan grande, al rey católico de las Españas, que prosperen los cielos largos

63) Sánchez, p.160.

64) Ibid., p.164.

siglos... no quiso Dios se efectuase con otro que con el rey de España y de este sol se vistiese esta tierra;<sup>65)</sup>〔キリストは、(征服と聖母顕現という) これらの衝撃的な帰結を、太陽に抱かれたかくも遠隔の地にもたらした。天の太陽であるキリストは、(匹敵する)もうひとつの太陽、すなわちスペイン帝国のカトリック王が(新世界の征服と布教という)大事業の主となり、末永く繁栄するよう望んだのであろう。…神は、他ならぬスペイン国王によってこの偉業が実現され、この地メキシコが太陽たるスペイン国王のものになるよう希求したのである。〕

②女が自分の場所である荒野に飛んで行くために与えられた大きなわしの二つの翼はキリストの十字架であると解され、これに気づいたのはイエズス会士ディエゴ・デ・バエサらのおかげであると明記している。

... con la seguridad de haber leído en el doctísimo padre Diego de Baeza de la sagrada Compañía de Jesús, nuestra madre, ... Estas dos alas significan los dos brazos de la santa cruz,<sup>67)</sup>〔イエズス会のディエゴ・デ・バエサ神父の書を読んだことによる確信から、これらの二つの翼はキリストの十字架の二翼を意味している (と気づいた)。〕

これは当時敵しかった異端審問のことを念頭に置いてのこのことようである。

... santísimo Tribunal de la Inquisición, ha descubierto y penitenciado con su acostumbrada misericordia tantos enemigos de nuestra santa fe,<sup>68)</sup>〔異端審問所は、その常なる慈悲精神によって、かくも多くのカトリックの敵を見出し、罰してられました。〕

65) Ibid., p.165.

66) Ibid., p. 166.

67) Ibid., p. 172. 本書には何度か「この解釈はイエズス会士の某に負っている」という記述がある。イエズス会がグアダルパニスモを推進していったことは周知のことであるが、この修道会の特徴は、「神の知らぬ事などあるはずがない。新大陸の先住民の存在もその信仰のことももちろん神は知り尽くされていた」という楽観的信条ゆえに、偶像崇拜は真のキリスト教信仰にいたるまでの段階にすぎず、神の恩寵は人間として生得のものなので福音伝道の必要すらないという考え方にあったと言える。ここがフランシスコ会とは決定的に袂を分かつ点であり、そのために次第に勢力図に変化が生じていった。

68) Ibid., p.173.

③へびが女をおし流そうとして口から吐き出した川のような水をメキシコ市の洪水になぞらえているのは、とくに1629年に始まった大水害を中心とした当時の災害状況を反映していると言える。

cuántas veces México enmedio de las aguas ha levantado voces creciendo<sup>69)</sup> con lágrimas, [メキシコは、幾度水害に見舞われ、涙して声をはり上げたことか。]

さらに Milagroso descubrimiento de la santa imagen, con los prodigios de su aparición の節〈聖像の超自然的発見と顕現の奇蹟について〉において、いわゆるよく知られた、計5回の聖母顕現のくだりの原型となった話が微細に復元<sup>70)</sup>される。そのうえで本節の最後には、次節でグアダルーベ聖母像の細密描写を行なう意向を述べ、サンチェスが解釈に最も力を入れたと思われる本書の中枢部が始まるのである。

Yo me constituí pintor devoto de aquesta santa imagen escribiéndola ; he puesto el desvelo posible copiándola ; amor de la patria dibujándola ; admiración cristiana pintándola ; pondré también la diligencia retocándola.<sup>71)</sup> [私は、かの聖母像の忠実な画家になって描写し、可能なかぎり努力して複製し、祖国愛をこめ、キリスト教徒としての崇拜の念に憑かれて書きました。仕上げにあたって、精励を尽くすつもりです。]

それが Pincel cuidadoso de la santa imagen, que con amorosos elogios retoca su pintura 〈聖像画を賛美しつつ仕上げている入念な筆致について〉である。本節の冒頭でいま一度、聖アウグスティヌスの教えを基盤としていることを繰り返して確認する。

A San Agustín mi sagrado maestro debo... el ánimo, determinación y

69) Ibid., p.175.

70) Ibid., pp. 178-197.

71) Ibid., p.197.

camino para celebrar la milagrosa aparición de María Virgen Sacratísima Madre de Dios, en esta su santa imagen de nuestro mexicano Guadalupe, . . . Hablemos (dice) con los mismos milagros, preguntémosles qué nos enseñan de Cristo, y ellos nos responderán.<sup>72)</sup> [神の母なるマリアが我らがメキシコのグアダルーベの聖像となって奇跡的に出現したことを祝うために、意志と決心と方法を授けてくださったのは、私の崇める師、聖アウグスティヌスである。…師の仰すごとく、(この奇跡に関しては)奇跡そのものを問い、奇跡がキリストについて我々に何を教えてくれているのか、尋ねかけることにしましょう。そうすれば、奇跡はおのずから我々に答えを与えてくれるはずです。]

着目している点は、ファン・ディエゴのマントの布地(マゲイという当地独特の、先住民にとって有用で重要な植物で織られていること)、聖母像の容姿・容貌(たとえば小麦色の肌、懐胎していること)、身につけているもの(上衣、マント、王冠<sup>73)</sup>、足下の天使)などである。そしてメキシコが選ばれた土地であるという論調を補強するために、聖書の中のさまざまなエピソードを想起して独自の解釈を加えるのである。まず、グアダルーベの聖母の奇蹟を「アーロンの杖」の奇蹟<sup>74)</sup>に照らし合わせ、そのあと、百年以上経過しているとされる聖母像の顕れたファン・ディエゴのマントがまったく疲弊していないことを、『申命記』第八章のユダヤ人たちの衣服のことと同等視する。

Ingratitud pareciera si dilatara una amorosa exhortación a los nacidos en mi patria y criollos de aqueste Nuevo Mundo, sea la del cap. 8 del Deut., . . . Cuarenta años caminasteis por el desierto, y en todo aquel tiempo vuestros vestidos que os abrigaban y cubrían, no se consumieron,

72) Ibid., p.198.

73) 王冠がこの時点では描かれていたことがわかる。これは当初はなかったもので、18世紀に教皇庁によってメキシコ市とさらにヌエバ・エスパーニャ全体の守護聖母に認められるべく交渉中の時期には再び消えていた。そしてこの聖母の戴冠冠が公式に営まれたのは1896年のことであった。

74) Ibid., pp.206-208.

gastaron, ni envejecieron, ... Aquí la manta en hilos de un maguey, tejida a ingenio humilde, ... no podía asegurar la permanencia, que hoy por lo divino está gozando. ... con devota pretensión para este escrito, llegué a tocarla, y la descubrí, sentí y experimenté del porte referido y prometiendo eterna duración,<sup>75)</sup>〔わが祖国に生まれし者、この新世界のクリオーリヨのために、『申命記』第八章（に関連するファン・ディエゴのマントのこと）にも触れておかなければ私の仕事は不十分と言えるであろう。…「汝らは40年間荒野を徘徊していたが、その間ずっと身を包んでいた衣服は消耗したり古びたりしなかった。」…ここではマゲイの糸で織られた粗末な布なので、耐久性があろうとは思われなかったのに、神聖なる力によって今日も持ちこたえている。…本書を書き上げるという敬虔な意図とともに、私はこの布に触れ、その神秘を見つけ、粗末に見えながら永遠の寿命が約束されていることを感じ味わった。〕

ヨハネ（スペイン語ではファン）という名前の重要性を挙げたときには、当時の異端審問官ファン・デ・マニョスカに触れておくことも忘れてはいない。

...gobierna la Iglesia santa de México otro Juan, el ilustrísimo y reverendísimo señor Don Juan de Mañozca,<sup>76)</sup>〔もうひとりのヨハネ、すなわち、ファン・デ・マニョスカ貌下が、メキシコの聖界を治めておられる。〕

そして、聖母像が太陽（光輪のうちに立っているのは太陽を背後にしていること）、月（足下の三日月）、星（マントに浮かぶ）を占有し統御していることから、メキシコを新天地 un nuevo paraíso であると断言しているところが、ラファイエをして、「ミゲル・サンチェスは祖国メキシコ la patria mexicana の真の創出者である」と言わしめたゆえんのひとつでもあろう。

75) Ibid., p.212.

76) Ibid., pp.215-216. ここでは Juan Diego, Juan de Zumárraga, San Juan を挙げているのみであるが、ほかに Juan Diego の叔父である Juan Bernardino と、サンチェスが神学上の影響を受けたと推測できる San Juan Damasceno (ダマスクスのヨアンネス) も彼の念頭にあったはずである。

77) Lafaye, p.353.

... si esta mujer aparecida en el cielo, tiene posesión del sol, luna y estrellas, y con todas baja a su tierra, es pronóstico seguro que ha de ser para bien de la tierra, ... [天に顕れたこの女性が、太陽と月と星を占有し支配しており、それらとともに地上に降りるとしたら、地上の者にとって恩恵となるであろうことは確実に預言しうる。…]

Tener todas estas luces. . . es declararse baja a la tierra a fundar un nuevo paraíso.<sup>78)</sup> [これらの光明をすべて所有しているということは…新たな楽園を築くために地上に降りるのだという宣言に相当する。]

また、グアダルーペの聖母のマントに46個の星があることを指摘し、その数は、黙示録第十二章でミカエルとその御使たちとが龍と戦ったとき、龍とともに応戦した御使たち（天使）を指すとも説明する。

... estas estrellas a los hombres predestinados, ... el número que es de cuarenta y seis; ... según sienten Santo Tomás y San Bernardo, en ajustándose el número de los predestinados y ocupándose con ellos los lugares que dejaron los ángeles malditos, se ha de acabar el mundo.<sup>79)</sup> [これらの星は神が救霊を約束した人々を指し、…その数は46…それは聖トマスと聖ベルナルドゥスが感知したことに従えば、救霊を約束された人々の数と合致し、(龍の味方についた)悪い天使らがあとにした場所を彼らとともに陣取ることで、世界は終末を迎えることであろう。]

こうした解釈には、ラファイエやブレイディングの言うヨアキム・デ・フィオーレ(1130-1202)の影響が読み取れるようである。すなわち、1260年に始まるはずの聖霊の時代の末にはキリストの再来が起り、人間は天に召されこの世が終末を迎えるという「ヨハネの黙示録」のヨアキムなりの解釈であり、その影響を多大に受けたフランシスコ修道会厳修派のモトリニアやメンディエタの著作を通して、サンチェスもその影響を受けていた可能性があると考えられるのである。<sup>80)</sup>

78) Sánchez, p.217.

79) Ibid., pp.226-227.

80) Lafaye, pp.76-78; Brading, pp.20-22.

そして昂揚した語調で、クリオーリョ的で力強い楽観的な展望を示す。

Queridos ciudadanos de México, este es el día que debió desearse, alégrese nuestra tierra con espirituales júbilos en el milagroso nacimiento y florido renacer de tal Virgen como María...; de aquí adelante los de México aviven las esperanzas...: las esperanzas de que han de florecer.<sup>81)</sup>〔わが愛するメキシコの民よ、今こそ望まれるべき日が来た。マリアのごとき聖母の奇跡的誕生と、その花のような再来（マントの上の顕現）に心から歓喜なさい。これからはメキシコの民よ、希望を高くもちなさい。必ずや開花するのだという希望を。〕

また、黙示録の女の大きなわしの二つの翼をキリストの十字架に再度なぞらえている箇所、わしを選んだということは、メキシコの古来の紋章を知らしめるよう、両者（十字架とアステカの紋章）を対峙させたのではないかとサンチェスは類推する。

Sea el segundo motivo haber querido honrar a la ciudad de México, así lo pruebo... Parece que la elección de águila confronta con el blasón primitivo de México porque se conozca,<sup>82)</sup>〔メキシコ市に榮譽を与えようと神が望んだことが、第二の動機であろう。…わしを選んだことは、メキシコの古来の紋章と対置し、後者を知らしめるためであったと思われる。〕

ここで、デ・ラ・マサによる黙示録とグアダルーペの聖母譚の相関関係の図式<sup>83)</sup>を提示することによって、サンチェスの釈義を整理してみることにする。〔 〕で示した部分は筆者による追加である。

黙示録の女	=	グアダルーペの聖母
聖ヨハネ	=	フアン・ディエゴ
聖ミカエル	=	エルナン・コルテス
天使	=	コルテスの部下、征服者

81) Sánchez, p.231.

82) Ibid., p.234.

83) De la Maza, pp.70-71.

[七ツ頭の] 龍	=	[七ツのナワ部族の] 偶像崇拜
二つの翼	=	アステカの紋章, [キリストの十字架]
都	=	メキシコ市
荒野	=	テペヤクの丘
太陽	=	熱帯地方, [スペイン国王]
月	=	メキシコ市の湖沼
星	=	新天地, [龍とともに地に投げ落とされた天使]
[洪水]	=	[メキシコ市の水害]

次に, Solemne colocación de la santa imagen en su ermita de Guadalupe <グアダルーペの礼拝堂での霊像の厳かなる安置について> と題し, 手短かに聖母像の配置について記したあと, Descripción del santuario de Guadalupe が続く。そこでは, まずテペヤクをエルサレム南東の丘シオンと同一視している<sup>84)</sup>。そのあと, グアダルーペの聖母とフアン・ディエゴの関係を聖リベカと息子聖ヤコブの関係に照合する<sup>85)</sup>。それからグアダルパニスモの順調な普及のおかげで, お布施によって新たな聖堂が建立され, 1622年, ときの大司教フアン・デ・ラ・セルナによって落成されたこと, 主祭壇の中央に聖母像が据えられ, それは当時はヌエバ・エスパーニャの, そして本書執筆時点ではペルーの副王であるサルバティエラ伯爵<sup>86)</sup>が奉納した銀製の聖櫃の中に納められていることなどが忠実に記されている。

サンチェスの筆になる最後の部分は, Milagros de la santa imagen de Guadalupe <グアダルーペの聖像の奇跡について> で閉じられる。注目されるのは, 聖母のもたらした奇蹟の叙述のほか, グアダルーペと並んでロス・レメディオスの聖母に対する信仰にも触れ, 前者をメキシコで生まれたクリオーリ

84) Sánchez, p.239.

85) Ibid., p.241.

86) Ibid., pp.243-245.

ヤであることからノエミに、後者をスペインからの外来であることからルツに見立てていることであろう。<sup>87)</sup> 締め括りとして、本書の執筆動機を次のように強調している。

Los fines fueron estos... No me movió la honra para acreditarme de entendido, no el interés para solicitar caudales, no la vida para anhelar en ella pretensiones; movióme la patria, los míos, los compañeros, los ciudadanos, los deste Nuevo Mundo; [これらが(執筆の)<sup>88)</sup> 目的であった。…博識な神学者として認められ、名声を得るために書いたものでも、富を手に入れようとしての利害意識からでも、大望を希求する人生のゆえでもない。私を動機づけたのは祖国であり、同胞、仲間、この新世界の人々であった。] つまり、もっぱら「祖国とその同胞のために」という気持ちに突き動かされたのだと。

このあと、首都大聖堂の役職者で大学の神学教師のフランシスコ・デ・シレス Francisco de Siles と、サンチェスの近しい友人でグアダルーペ聖堂の主任司祭のルイス・ラソ・デ・ラ・ベガから著者への書簡が掲載されている。このうち、サンチェスのこの労作の祖国に与えた成果をシレスが「1666年の報告」に結実させ、メキシコの国民意識の発生と発展に寄与したことはラファイエの指摘していることである。またラソは、この翌年に *Hueitlamahuiltica* と題する、グアダルーペの聖母顕現譚と奇蹟についてのナワトル語版を出版した人物であるが、サンチェスの著書の末尾にその感想を添えて、本書の果たした役割がいかに大きかったかを表現している。

...hemos sido Adanes dormidos poseyendo a esta Eva segunda en el paraíso de su Guadalupe mexicano,<sup>90)</sup> [我々はさながら、メキシコのグアダ

87) Ibid., pp.247-248.

88) Ibid., pp.256-257.

89) ラソに関しては前掲の拙稿を参照されたい。

90) Sánchez, p.265.

ルーペの楽園に、この第二のエバを手にしていながら眠っているアダムでした。]

#### IV おわりに

ミゲル・サンチェスが、王室はもちろん教会や大学関係者の見解をいかに意識し、異端審問の危険にも配慮しながら、ペニンスラールに対するクリオーリョとしての権利主張や愛国意識を強い動機として、グアダルーペの聖母に関する著書をあらわしたか、を確認することができた。

グアダルパニスマの解釈をめぐるにつねに、聖母像の超自然的起源の史実性を前提としているいわゆる *la tesis aparicionista tradicional* と、その史実性を否定する *la idea de la protohistoria guadalupana*<sup>91)</sup> = *la tesis antiaparicionista* というどちらかの立場に分類することが可能である。ところがサンチェスの場合、聖母顕現の真实性を当然否定するわけではないが、史実性を立証することには興味がなく、グアダルパニスマをクリオーリョの現状改善のためにどうしても必要な力として位置付けているために、聖書を駆使してその理論的正当性を確立しようと労作しているように見える。グアダルパニスマはサンチェスにとって、宗教の問題としてよりも、クリオーリョの目からみた政治の問題としてより強く意識されていたのではないだろうか。彼にとってグアダルーペの聖母はスペインの力を削ぐ役割を果たし得る存在だったと言えよう。すなわち、前章で検討したサンチェスの解釈を簡単に述べるとしたら、先住民の王国を勝ち得たのはコンキスタドーレス（征服者）ではなく聖母だったのであり、それはクリオーリョの楽園をこの地に創設するという目的のためであった。龍（＝ウィツィロポチトリ）を負かしたものの、地に投げ落とされた天使（＝主役から脇役になりさがった征服者）に囲まれているので、インディアスのあらゆる人々を愛し祖国を与えることがグアダルーペの聖母の意図だった、という解釈はきわめて現世的、世俗的、政治的である。このグアダルパニスマの政治学は、こののちイエズス会士の活動と合体し、19世紀初頭の独立運動期

91) この表現は O'Gorman, 1991に拠った。

になると明確な姿を現わすようになるのである。

本書の与えた影響はいかなるものであったかとみてみると、以後三回しか版を重ねなかつた<sup>92)</sup>。このことは物理的に少数しか出回らなかつたことを意味しており、また、ラテン語文が随所に散りばめられた文体からは広い読者層を得たとは想像しがたい。しかし、本書がもととなって、その後多くのグアダルパニスモの書が編まれたことも、この信仰が国民的規模に普及するにいたつたことも確かなのである。<sup>93)</sup>「私も私の前任者たちも、メキシコのグアダルーペの樂園にこの第二のエバを手にしていながら、眠っていてそれに気づかぬアダムでし<sup>94)</sup>た。」この、当のグアダルーペ礼拝堂主任司祭ラソの言葉は、すでに1622年にグアダルーペ寺院が完成した頃から奉職していた聖職者すら、サンチェスの著作が出るまで顕現譚や奇蹟をどう解釈すべきかについてほとんど何も知らなかつたということを物語っているのである。

## 史 料

Sánchez, Miguel, *Imagen de la Virgen María Madre de Dios de Guadalupe, milagrosamente Aparecida en la Ciudad de México. Celebrada en su Historia, con la Profecta del capítulo doze del Apocalipsis.*

A devoción del Bachiller Miguel Sánchez Presbítero. Dedicado Al Señor Doctor Don Pedro de Barrientos Lomelín, del Consejo de su Magestad, Tesorero de la Santa Iglesia Metropolitana de México, Gobernador, Provisor y Vicario de todos los Conventos de Religiosas de esta Ciudad, Consultor del Santo Officio de la Inquisición, Comissario Apostólico de la Santa Cruzada en todos los Reynos, y Provincias de esta Nueva España, & c. (Un grabado.) Con licencia y privilegio, en México, en la Imprenta de la

92) De la Maza, pp.55-56.

93) Alberro y Gruzinski, p.52.

94) Sánchez, p. .

Viuda de Bernardo Calderón. Véndese en su tienda en la calle de San Agustín, año de 1648, 6 h., 96 ff., 7 h. (En Torre Villar, Ernesto de la y Navarro de Anda, Ramiro)

*Información que el arzobispo de México D. Fray Alonso de Montúfar mandó practicar con motivo de un sermón que en la fiesta de la Natividad de nuestra Señora (8 de septiembre de 1556), predicó en la capilla de San José de Naturales del Convento de San Francisco de México, su Provincial Fray Francisco de Bustamante, acerca de la devoción y culto de nuestra Señora de Guadalupe*, Madrid, Imprenta de La Guirnalda, Calle de las Pozas, núm. 12, 1888, IX, 54 (23) pp. Otra edición en: México, Imprenta de Ireneo Paz, 1891. XIII, 188, III (1) pp. y en México, Centro de Estudios Bernardino de Sahagún, A.C.

#### 参 考 文 献

- Alberro, Solange, *Del gachupn al criollo o de cómo los españoles de México dejaron de serlo*, El Colegio de México, México, 1992.
- , *Inquisición y sociedad en México, 1571-1700*, Fondo de Cultura Económica, México, 1993 (Primera edición en francés, 1988).
- Alberro, Solange, y Gruzinski, Serge, *Introducción a la historia de las mentalidades*, Seminario de Historia de las mentalidades y religión en el México colonial, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, 1979.
- Altamirano, Ignacio Manuel, *Paisajes y leyendas. Tradiciones y costumbres de México*, Editorial Porrúa, S.A., México, 1989 (Primera impresión, 1884).
- Benítez, Fernando, *Los primeros mexicanos. La vida criolla en el siglo XVI*, Biblioteca Era, 1985 (Primera edición, 1953).
- Blanco, José Joaquín, *Esplendores y miserias de los criollos*, Cal y arena, México, 1989.
- Brading, David A., *Orbe indiano. De la monarquía católica a la república criolla, 1492-1867*, Fondo de Cultura Económica, México, 1991 (Primera edición en inglés, 1991).
- Chevalier, François, *La formación de los latifundios en México*, Fondo de Cultura Económica, México, 1976 (Primera impresión en francés, 1953).
- Elliott, J.H., *Richelieu and Olivares*, Cambridge University Press, Cambridge, 1991 (*First published*, 1989).
- Gage, Thomas, *Viajes por la Nueva España y Guatemala*, *Historia* 16, Madrid, 1987.

- Gruzinski, Serge, *La guerra de las imágenes. De Cristóbal Colón a "Blade Runner"* (1492-2019), Fondo de Cultura Económica, México, 1994 (Primera edición en francés, 1990).
- Israel, Jonathan I., *Razas, clases sociales y vida política en el México colonial (1610-1670)*, Fondo de Cultura Económica, México, 1980 (Primera edición en inglés, 1975).
- Konrad, Herman W., *Una hacienda de los jesuitas en el México colonial: Santa Lucia, 1576-1767*, Fondo de Cultura Económica, México, 1989 (Primera impresión en inglés, 1980).
- Lafaye, Jacques, *Quetzalcóatl y Guadalupe. La formación de la conciencia nacional en México*, Fondo de Cultura Económica, México, 1985 (Primera edición en francés, 1974).
- Lockhart, James, *The Nahuas After the Conquest. A Social and Cultural History of the Indians of Central Mexico, Sixteenth Through Eighteenth Centuries*, Stanford University Press, Stanford, California, 1992.
- Maza, Francisco de la, *El guadalupanismo mexicano*, Fondo de Cultura Económica, México, 1981 (Primera edición, 1953).
- Miranda, José, "La población indígena de México en el siglo XVII", *Historia y Población en México (siglos XVI-XIX)*, Lecturas de «Historia Mexicana» 9(XII: 2[46] oct.-dic. 1962), El Colegio de México, 1994.
- Nebel, Richard, Santa María Tonantzin Virgen de Guadalupe. Continuidad y transformación religiosa en México, Fondo de Cultura Económica, México, 1995 (Primera edición en alemán, 1992).
- Noguez, Xavier, *Documentos guadalupanos. Un estudio sobre las fuentes de información tempranas en torno a las marionetas en el Tepeyac*, El Colegio Mexiquense, A.C. y Fondo de Cultura Económica, México, 1995 (Primera impresión, 1993).
- O'Gorman, Edmundo, *Destierro de sombras. Luz en el origen de la imagen y culto de Nuestra Señora de Guadalupe del Tepeyac*, Universidad Nacional Autónoma de México, México, 1991.
- Peña, José F. de la, *Oligarquía y propiedad en Nueva España (1550-1624)*, Fondo de Cultura Económica, México, 1983.
- Phelan, John Leddy, *The Millennial Kingdom of the Franciscans in the New World. A Study of the Writings of Gerónimo de Mendieta (1525-1604)*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1956.
- Riva Palacio, Vicente (Dirección), *México a través de los siglos. Historia general y completa del desenvolvimiento social, político, religioso, militar, artístico, científico y literario de México desde la antigüedad más remota hasta la época actual*, Tomo II (Historia de la dominación española en México desde 1521 a 1808), Balleza y comp., editores, México,
- Romano, Ruggiero, *Coyunturas opuestas. La crisis del siglo XVII en Europa e Hispanoamérica*, El Colegio de México y Fondo de Cultura Económica, México, 1993.

- Rubial García, Antonio, *Una monarquía criolla (La provincia agustina en el siglo XVII)*, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, México, 1990 (Primera edición, 1989).  
染田秀藤編『ラテンアメリカ史—植民地時代の実像』世界思想社, 1989年。
- Sosa, Francisco, *El episcopado mexicano. Biografía de los ilmos. señores arzobispos de México desde la época colonial hasta nuestros días*, Tomo I, Editorial Jus, S.A., México, 1962 (Primera edición, 1877).
- 立石博高・若松隆編『概説スペイン史』有斐閣選書, 1987年。
- Torquemada, fray Juan de, *Monarquía indiana*, Volúmen VII, Universidad Nacional Autónoma de México, 1983 (Primera edición en Sevilla, 1615).
- Torre Villar, Ernesto de la, y Navarro de Anda, Ramiro (Compilación, prólogo, notas bibliográficas e índices), *Testimonios históricos guadalupanos*, Fondo de Cultura Económica, México, 1982.
- Vargas Ugarte, Rubén, S.J., *Historia del culto de María en Iberoamérica y de sus imágenes y santuarios más celebrados*, Tomo I y II, Madrid, 1956.
- ビーベス, J. ヒセンス, 『スペイン—歴史的省察』岩波書店, 1975年。
- Warner, Marina, *Alone of All Her Sex. The Myth and the Cult of the Virgin Mary*, Vintage Books, New York, 1983.

## **Miguel Sánchez, arquitecto de la historia, el fervor y el nacionalismo guadalupano. Contexto histórico de su obra**

Yukari Hojo

La autora se propone, en primer lugar, investigar el trasfondo político-social de la primera mitad del siglo XVII, época en la que Miguel Sánchez nace, se prepara y escribe su obra principal sobre el culto a la Virgen de Guadalupe, para entender mejor los motivos que llevaron a su publicación y, en segundo lugar, analizar esta obra tomando en cuenta dichas condiciones históricas para dar cuenta de las razones por las que se ha llegado a considerar a Sánchez como “el verdadero fundador de la patria mexicana”.

A lo largo del análisis nos dimos cuenta de la enérgica reafirmación patriótica de un criollo culto al mismo tiempo que su preocupación por las opiniones de autoridades político-eclesiásticas como la Corona, la Iglesia, el grupo universitario que lo rodeaba y su cuidado por no ser acusado por la Inquisición.

La “aparición” de la Virgen le resta poder a España: no fueron los conquistadores sino la Virgen quien ganó el país para instaurar allí un paraíso criollo; como la portentosa mujer del capítulo 12 del Apocalipsis vence al dragón (Huitzilopochtli) rodeada de ángeles (los conquistadores) para mostrar a los nacidos en América su predilección y darles patria incluyendo a los indios. Así, resulta que en la obra de Sánchez además de religioso, el asunto guadalupano, tiene consecuencias eminentemente políticas.